



情報環境機構



永井 靖浩 教授

近年、情報通信分野の技術革新は驚くべきスピードで進んでいます。今回は京大のICT化に尽力されている永井教授にお話を伺いました。（おぐら）

基本データ

- 1979年 慶應義塾大学工学部計測工学科 卒業
- 1981年 慶應義塾大学院工学研究科
計測工学専攻修士課程 修了
日本電信電話社（現NTT） 研究員
- 2006年 京大大学術情報メディアセンター 教授
- 2011年 情報環境機構 IT企画室 教授（現職）

ICT(Information Communication Technology)を専門分野として、研究開発に取り組んでいる。



大学での研究からNTTへ



永井 靖浩



まず、僕は京大出身ではなくて。本当は国立大志望だったんだけど、歴史の勉強が間に合わなかった（笑）。

大学在学中は「イオンビームスパッタ」の研究をした。これは、イオンビームを固体に照射してそこから飛び出す粒子で試料に薄い膜を生成する技術なんだ。この研究に目をつけたのは、とにかく新しいこと、誰もやってないことがやりたかったから。たとえば、やってみたら何の役にも立たない技術だったとしてもね。



おぐら編集部員

なるほど、新しいことに挑戦したかったんですね。卒業後は電電公社、現在のNTTに入社されたそうですが、その研究は生かすことができましたか？ また、NTTでの25年間はどのような研究に取り組まれたのですか？



永井 靖浩

そうだね。入社当初の研究はイオンビームスパッタの延長線上にあった。電電公社が日本のコンピュータの性能を底上げするためにDIPSっていうコンピュータを作ったんだけど、その磁気ディスクの担当だったな。

その後、酸化物超伝導ってのが流行って、その材料と通信応用のデバイスを作ったんだけど……ダメだったね（笑）。アンテナは小さくなくても、冷却装置が大きくなってさ。

最後の5年間は研究部門からビジネス部門に異動になってね。e-Japan推進部ってところで、住基ネットに関わるシステムとか、国と関係するプロジェクトに取り組んだ。

京大での研究



永井 靖浩



NTTから京大に移ったのは、京大がICカードや認証システムに詳しい人を求めている、NTTにも声をかけてもらったのがきっかけ。その頃ちょうど仕事に一区切りついた時期だったから、「永井ちゃんいいじゃん」ってなって、8年前に京大にきた。

大学っていうのは企業から見たらやっぱり特殊な環境だと思う。そういう意味ではある意味面白いかな。京大はやっぱり個性の強い人が多いよね、教授も含めて。学生はもっと「イカ京」みたいな人が多いのかと思ってたけど、最近は変わってきてるみたい（笑）。



おぐら編集部員

京大に来てから携わっていらっしゃる研究やプロジェクトはありますか？



永井 靖浩

認証システムみたいな、情報基盤に近いものを研究対象にしている。皆さんが使ってる全学生共通ポータルとかIC学生証を整備したのも僕だし。全学的な取り組みは難しいんだけど、関係者の方々のご協力もあって、旧帝大の中ではうまくいっている方だと思うな。

これらを導入するときに意識したのは、どうすれば学生が利用するかってこと。その意味ではKULASISと生協の電子マネーは必ず取り込まないといけないな。普及のきっかけになるキラーサービスだと思ったからね。

この関係もあって昔生協の理事をやってたんだ。だから『らいふすてーじ』は愛読してる。最後のページの十人十色、面白いよね（笑）。

現代社会におけるICT



永井 靖浩



最近注目されてるICTは、インターネット上にデータを保存するクラウド、あとはビッグデータかな。ビッグデータ活用の例としては、企業が持つ大量のデータから、ある特定の顧客層に対してどんな行動パターンがあるかを割り出して、その情報を元に店舗展開を決めたりするといったことがあるらしい。



おぐら編集部員

「オープンデータ」という言葉も新聞などでよく目にするんですが……。



永井 靖浩

自治体のオープンデータは総務省が主導してやろうとしてるね。要するに、行政が持っている情報を民間が使える、もっと役に立つんじゃないかってこと。行政のサービスってみなさんあまり使わないでしょ？



おぐら編集部員

そのような動きは今後さらに進んでいくと思うのですが、問題点はないですか？



永井 靖浩

情報セキュリティの観点では課題も多い。秘匿性の高いデータをクラウドで保存しているのか、ビッグデータから抽出した統計データを集約・分析すれば個人が特定されるのではないかと。とかね。「守りたい情報を守るのは自分自身」という意識が大事な。

大学教育とICT



永井 靖浩



全学の皆さんにこれからのICT導入イメージを共有してもらうために、京大でも昨年夏に「ICT基本戦略」っていうのを定めた。

今強化しようとしているのは、PandAみたいなラーニングマネジメントシステムだね。あと、反転教育っていうのもあって、今までは自宅で予習復習をして講義を受けてたけど、それを逆に、自宅で講義を受けてその結果を大学で議論するようなことを目指してる部分はあるかな。つまり、自学自習ってこと。教員や他の学生とのインタラクティブな場面では、相手の考えを理解しながら、自分の考えを深めていくべきだよ。



おぐら編集部員

では、最後にこれからICT社会を生きていく京大生へメッセージをお願いします。



永井 靖浩

ICTなんて得体の知れないものかもしれないけど、積極的に触れて、どんなものか感じるべきだと思う。時にはちょっと痛い目に遭うかもしれないけど、そうやって危険があることを知っておけば、大怪我はしないはず。

これからの知識社会において大切なのは、自分で考える能力、そして社会と自分自身の将来ビジョンだと思う。この2つを持っておけば、時々成功するんじゃないかな（笑）。



おぐら編集部員

貴重なお話をありがとうございました！

はみだし
すてーじ

「甘い小芋」は辞書に載っていない単語であるのに、なぜ正解なのですか？ 「拍手喝采」という答えを出すのに2時間かかった。（農・2 1628）
⇒気の迷いで正解にしてしまったと伺っています。今後は厳格化していく所存です。（当時の執筆者もまだ納得してないとか；編）

はみだし
すてーじ

インフルやばいっす。マジやばいっす。
⇒ありがたいことに、今季はまだかかってないですね〜

（理・院 おえど）
（なお、京大生協上層部には蔓延した模様；編）